

[B年] 受難節第4主日(2026年3月15日)**【旧約聖書日課】 出エジプト記 24章12～18節**

¹²主が、「わたしのもとに登りなさい。山に来て、そこにいなさい。わたしは、彼らを教えるために、教えと戒めを記した石の板をあなたに授ける」とモーセに言われると、¹³モーセは従者ヨシュアと共に立ち上がった。モーセは、神の山へ登って行くとき、¹⁴長老たちに言った。「わたしたちがあなたたちのもとに帰って来るまで、ここにとどまっていなさい。見よ、アロンとフルトがあなたたちと共にいる。何か訴えのある者は、彼らのところに行きなさい。」

¹⁵モーセが山に登って行くと、雲は山を覆った。¹⁶主の栄光がシナイ山の上にとどまり、雲は六日の間、山を覆っていた。七日目に、主は雲の中からモーセに呼びかけられた。¹⁷主の栄光はイスラエルの人々の目には、山の頂で燃える火のように見えた。¹⁸モーセは雲の中に入って行き、山に登った。モーセは四十日四十夜山にいた。

【使徒書日課】**コリントの信徒への手紙二 4章1～6節**

¹こういうわけで、わたしたちは、憐れみを受けた者としてこの務めをゆだねられているのですから、落胆しません。²かえって、卑劣な隠れた行いを捨て、悪賢く歩まず、神の言葉を曲げず、真理を明らかにすることにより、神の御前で自分自身をすべての人の良心にゆだねます。³わたしたちの福音に覆いが掛かっているとすれば、それは、滅びの道をたどる人々に対して覆われているのです。⁴この世の神が、信じようとはしないこの人々の心の目をくらまし、神の似姿であるキリストの栄光に関する福音の光が見えないようにしたのです。⁵わたしたちは、自分自身を宣べ伝えるのではなく、主であるイエス・キリストを宣べ伝えています。わたしたち自身は、イエスのためにあなたがたに仕える僕なのです。⁶「闇から光が輝き出よ」と命じられた神は、わたしたちの心の内に輝い

て、イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光を与えてくださいました。

【福音書日課】 マルコによる福音書 9章2～10節

²六日の後、イエスは、ただペトロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。イエスの姿が彼らの目の前で変わり、³服は真っ白に輝き、この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほど白くなった。⁴エリヤがモーセと共に現れて、イエスと語り合っていた。⁵ペトロが口をはきんでイエスに言った。「先生、わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです。仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」⁶ペトロは、どう言えばよいのか、分からなかった。弟子たちは非常に恐れていたのである。⁷すると、雲が現れて彼らを覆い、雲の中から声がした。「これはわたしの愛する子。これに聞け。」⁸弟子たちは急いで辺りを見回したが、もはやだれも見えず、ただイエスだけが彼らと一緒にいられた。

⁹一同が山を下りるとき、イエスは、「人の子が死者の中から復活するまでは、今見たことをだれにも話してはいけない」と弟子たちに命じられた。¹⁰彼らはこの言葉を心に留めて、死者の中から復活するとはどういうことかと論じ合った。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

マルコによる福音書 9章2～10節

出エジプト記 24章12～18節

12主はモーセに言われた。「山に登り、私のもとに来て、そこにいなさい。私は彼らに教えるために、律法と戒めを書き記した石の板をあなたに授ける。」¹³そこで、モーセとその従者ヨシュアは立ち上がり、モーセは神の山に登った。¹⁴モーセは長老たちに言った。「私たちがあなたがたのところに帰るまで、この場所で待ちなさい。ここに、アロンとフルがあなたがたと共にいる。訴えのある者は誰でも、彼らのところに行きなさい。」

15こうしてモーセが山に登ると、雲が山を覆った。¹⁶主の栄光がシナイ山に宿り、雲は六日間山を覆った。七日目に主が雲の中からモーセに呼びかけられた。¹⁷主の栄光はイスラエルの人々の目には、山の頂を焼く火のように見えた。¹⁸そこで、モーセは雲の中に入り、山に登った。モーセは四十日四十夜山にいた。

コリントの信徒への手紙二 4章1～6節

1こういうわけで、私たちは、憐れみを受けてこの務めに就いているのですから、落胆しません。²かえって、恥じて隠したりせず、謀によって歩まず、神の言葉を曲げず、真理を明らかにし、神の前で自分自身をすべての人の良心に推薦します。³私たちの福音が覆い隠されているとするなら、それは、滅びる者たちにとって覆い隠されているのです。⁴彼らの場合、この世の神が、信じない者の心をくらまし、神のかたち〔別訳→像〕であるキリストの栄光に関する福音の光が見えないようにしたのです。⁵私たちは、自分自身を宣べ伝えるのではなく、主なるイエス・キリストを宣べ伝えています。私たち自身は、イエスのためにあなたがたに仕える僕なのです。⁶なぜなら、「闇から光が照り出でよ」と言われた神は、私たちの心の中を照らし、イエス・キリストの御顔にある神の栄光を悟る光を与えてくださったからです。

²六日の後、イエスは、ただペトロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。すると、彼らの目の前でイエスの姿が変わり、³衣は真っ白に輝いた。それは、この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほどだった。⁴エリヤがモーセと共に現れて、イエスと語り合っていた。⁵ペトロが口を挟んでイエスに言った。「先生、私たちがここにいるのは、すばらしいことです。幕屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのために。」⁶ペトロは、どう言えばよいか分からなかった。弟子たちは非常に恐れていたのである。⁷すると、雲が現れて彼らを覆い、雲の中から声がした。「これは私の愛する子。これに聞け。」⁸弟子たちは急いで辺りを見回したが、もはや誰も見えず、イエスだけが彼らと一緒におられた。

⁹一同が山を下っているとき、イエスは、「人の子が死者の中から復活するまで、今見たことを誰にも話してはならない」と弟子たちに命じられた。¹⁰彼らはこの言葉を心に留めて、死者の中から復活するとはどういうことかと論じ合った。

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・3月15日「受難節第4主日」の日課主題は「主の変容」。

・旧約日課は、「出エジプト記」から、「シナイ契約の締結式」を描く説話の一部。使徒書日課は、「コリントの信徒への手紙二」から、パウロが自分たちの宣べ伝える福音について説明する箇所。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、「主イエスの高い山での変容」を伝える伝承説話箇所。

旧約日課(出エジプト 24 章より)

・「出エジプト記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)の区分で「律法(トーラー)」の第二巻に位置づけられる伝承物語文書。「律法」の第五巻「申命記」までの四巻で編成される「モーセ物語」の第一部を構成し、モーセの誕生から、「主」の召命を受けてエジプトにいたイスラエルの人々を導き出し、シナイ山で授けられた「言葉と法」に基づいて彼らを「主」の契約の民とするまでを扱う。日課箇所は、その契約の民とされる「シナイ契約締結式」を描く場面の一部。

・「シナイ契約」は、通例 19～24 章のまとまりを指して言われる。ここには、モーセがエジプトから導き出した人々と共に最初の荒れ野の旅を経てシナイ山に辿り着き、そこで「十戒」をはじめとする主の「律法」を告げられ、これを人々が受け入れることによって主との契約関係に入ったということが綴られている。これらの中で、シナイ山で為されたという出来事については、19章、20章の一部および24章で物語られている。それによれば、山の上で主と直接に対面することができるのはモーセ一人であり他の者たちは離れていなければならないという記述が繰り返されながら、一部では、人々の代表にあたる者たちがモーセと共に神の前に立つことを許されているということも述べられている(19:22、19:24、24:9～11)。日課箇所では、モーセは一人で主の前に進み出る(ただし、「ヨシュア」が同行しているとも解せる)一方で、他の人々のもとには「アロンとフル」がとどまり共にいたとあり、彼らが特別な役割を与えられた存在であることを示唆している。アロンは、モーセの兄。フルは、アマレクとの戦い(17:8～15)で登場するユダ族の人。

・「主の栄光」(16節、17節)は、16:7,10や40:34,35でも用いられる表現で、「主の臨在」を意味していると解される。視覚的に「雲」(16節)や「火」(17節)を比喻として描かれており、主の臨在を「火の柱」や「雲の柱」(13:21～22、14:19～20、19:24、33:9～10)として繰り返し描写する本書の特徴と一致する。

・モーセが「律法授与」のためにシナイ山にとどまった期間は、「四十日四十夜」とされている。「金の雄牛事件」(32～33章)を経て「律法」の「掟の板」を再授与される場面でも、同様にモーセは「四十日四十夜」山にとどまったとされている(34:28。申 9:9,11,18,25、同 10:10 など参照)。

使徒書日課(Ⅱコリント 4 章より)

・「コリントの信徒への手紙二」は、「パウロ書簡集」の第三に置かれた書簡文書。パウロが、バルナバ宣教団を離脱して独自の宣教団を組織して展開したマケドニア伝道およびアテネ伝道を経た後、一時活動を休止するために滞在したコリントで、同地に寄留していたローマ教会共同体のメンバーであるユダヤ人夫妻アキラとプリスキラと共に創設に携わった教会共同体に宛てて、同地を離れた後に書き送った一連の書簡の中のの一つ。パウロは、コリントを離れた後、彼の支持者である信者らからの情報をもとに、教会がさまざまな問題を抱えて分裂の危機にあるとの認識から「一致」を勧める助言を伝えるために「手紙一」を書き送ったが、パウロと教会の人々との間には深刻な対立が生じ、これに対処するためにたびたび書簡を送ることになったと推認される。おそらく、パウロとコリント教会との間の対立はしばらく解消されず、深刻度を増していたが、パウロ自身が教会に対する態度をあらためることで徐々に対立は解消されることとなった。「手紙二」は、この対立解消を進めるためにパウロが書き送った書簡の一つと考えられる。

・パウロは、「手紙一」などを通して自分の働きがコリント教会の人々に誤解されていると認識し、これを解き、関係を正常化する必要があると考えている。同時に、パウロは、支持者からの情報を鵜呑みしたことによってコリント教会の実情に対して誤解していたことも認識するようになり、「手紙二」では、相互に対等な立場で信仰に基づいた率直な関係性を再構築しないといけないという認識のもとで、自分の務めを「和解の福音」に立脚したものとして理解してもらおうとしている。

・1節「務め(ディアコニア)」は、「パウロ書簡集」で多用される用語(23例)だが、特に本書簡では繰り返し用いられている(3:7,8,9、5:18「奉仕する任務」、6:3「奉仕の務め」、8:4「奉仕」、9:12「奉仕の働き」、9:13「奉仕の業」、11:8「奉仕」)。「ディアコニア」は、「使徒言行録」でも「教会」における「使徒」や「奉仕者」の働きを指して用いられている。

・日課箇所の「この務め」は、3:9「人を義とする務め」と表現される一連のパウロの働きを指して言われていると考えられ、日課箇所は前段 3 章で述べられていることの要約と解される。3 章では、「神の言葉」(2節、2:17)の解釈をめぐる「資格」(3:6)が論じられており、「霊」によって「心」に掛けられた「覆い」が取り除かれることによって、「主の栄光を映し出し…主と同じ姿に造りかえられ」(3:18)と主張されている。これらの主張は、「モーセ」の出来事の敷衍と発展的更新として述べられており、特に「金の雄牛事件」の後に山から下りてきたモーセの顔が「主の栄光」によって輝いていたが覆いによって隠されたという逸話(出 34:29～35)が主要な典拠となっている。パウロは、これを独自の自由な解釈で展開している。

福音書日課(マルコ 9 章より)

・日課箇所は、「主の変容」の伝承説話で、共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)が共通して伝える「受難予告から始まる一連の出来事」の主要な構成説話となっている。この説話は、主イエスと同行した三人の弟子が山上で経験した出来事と、彼らが下山時に交わした対話という二つの部分で構成されており、「ルカ」は後半部を伝えない代わりに、前半部にこの出来事が主イエスの受難予告として位置づけられるという解説を加えている(ルカ 9:31)。

・2 節「六日の後」(「ルカ」では「八日ほどたったとき」)は、前段の「ペトロの信仰告白と主イエスの受難予告」の出来事から一週後であることを示している。これは、一連の伝承説話が「主の日」ごとに記念されるようになっていたことを示唆しているのかもしれない。

・この出来事で、主イエスと同行した弟子は「ペトロ、ヤコブ、ヨハネ」の三人とされている。この三人は、最初に主イエスの弟子になった四人の漁師たちの内の三人であり、以来繰り返し主イエスの側近的な立場の人物として描かれており(5:37、13:3、14:33)、彼らが初代教会の中心的指導者となっていたことを示唆していると思われる。

・「山(オロス)」は、主イエスが「十二人」を「使徒」に任じられた場面(3:13)、祈るために一人になられた場面(6:46)、また最後の祈りをされた場面(14:46)など、霊的な営みを為す重要な場面の場として描かれている。日課箇所が特に「高い山」としているのは、より高次の霊的な営みを示すため、つまり天的な靈性を示すため、なのだろう。「エリヤ」および「モーセ」は、当時のユダヤ教世界で「死なずに天に上げられた信仰者」として広く認識されていた人物(創世記 5:24 が述べる「エノク」の存在も知られるが、この人物は黙示思想の中で扱われるようになっており、主流の人々は言及を避けていた可能性が高い)。当時のユダヤ教世界では、「マラキ書」3:23 の記述に基づいて「終末におけるエリヤの先駆的再来」という思想が広く信じられていたが、初期キリスト教は、「洗礼者ヨハネ」をその「再来のエリヤ」と位置づけて解釈した。また、一部の新約文書は、主イエスを「モーセ」の発展的再来と位置づけて解釈している。

来週の誕生日 (3月15日~21日)

主日礼拝の讚美歌から

・21-22「深き悩みより」(= I 258 詞)は、M・ルターが宗教改革運動の初期にドイツ人庶民のための詩編歌として作詞した一つで、詩編 130 編に基づいて作詞、1524 年出版の讚美歌集に加えられた。いくつかの曲で歌われてきたが、ダハシュタインの曲を付したもの。同じ詞にルター自身が古い教会旋法に基づいて作曲したものは 160 番に所収。『讚美歌 21』に採用される際に原詞に基づいて改訳されている。

・21-285「高き山の上」(= II 44 番)は、15 世紀英国のセーラム典礼聖務日課書に「イエスの変貌の祝日」のための聖歌として収められたラテン語聖歌。曲は、18 世紀フランスで発行された聖歌集から。

・21-402「いともとうとき」(= I 502 番)は、19 世紀英国人で福音唱歌作家として信徒伝道活動に励んだキャサリン・ハーンの作詞。曲は、同時代に米国で大衆伝道に携わり多くの福音唱歌を作曲した音楽家ウィリアム・フィッシャーの作曲。大衆伝道運動の中で広く歌われてきた。

21-22「深き悩みより」

Aus Tiefer Not Schrei Ich zu Dir

1. Aus tiefer noth schrei' ich zu dir, / Herr Gott! erhör' mein rufen! / Dein gnädig ohr neig her zu mir, / Und meiner bitt' sie öffne: / Denn so du wilt das sehen an, / Was sünd' und unrecht ist gethan, / Wer kann Herr! für dir bleiben?
2. Bei dir gilt nichts denn gnad' und gunst, / Die sünde zu vergeben; / Es ist doch unser thun umsonst, / Auch in dem besten leben: / Für dir niemand sich rühmen kann, / Deß muß dich fürchten jedermann, / Und deiner gnaden leben.
3. Darum auf Gott will hoffen ich, / Auf mein verdienst nicht bauen; / Auf ihn mein herz soll lassen sich, / Und seiner güte trauen, / Für dir zusagt sein werthes wort, / Das ist mein trost und treuer hort, / Deß will ich allzeit harren.
4. Und ob es währt bis in die nacht / Und wieder an den morgen, / Doch soll mein herz an Gottes macht / Verzweifeln nicht noch sorgen. / So thu' l'Israel rechter art, / Der aus dem Geist erzeugt ward, / Und seines Gott's erharre.
5. Ob bei uns ist der sünden viel, / Bei Gott ist vielmehr gnaden, / Sein' hand zu helfen hat kein ziel, / Wie groß auch sei der schaden. / Er ist allein der gute hirt, / Der Israel erlösen wird / Aus seinen sünden allen.

21-285「高き山の上」

O Wondrous Type (O Wondrous Sight)

1. O wondrous type! O vision fair / Of glory that the Church shall share, / Which Christ upon the mountain shows / Where brighter than the sun He glows!
2. From age to age the tale declare / How with the three disciples there, / Where Moses and Elias meet, / The Lord holds converse high and sweet.
3. With shining face and bright array, / Christ deigns to manifest today / What glory shall be theirs above / Who joy in God with perfect love.
4. And faithful hearts are raised on high / By this great vision's mystery; / For which in joyful strains we raise / The voice of prayer, the hymn of praise.
5. O Father, with the eternal Son, / And Holy Spirit, ever One, / Vouchsafe to bring us by Thy grace / To see Thy glory face to face. / Amen.

21-402「いともとうとき」

I Love to Tell the Story

1. I love to tell the story of unseen things above, / Of Jesus and His glory, of Jesus and His love; / I love to tell the story, because I know 'tis true, / It satisfies my longings as nothing else would do.
Refrain: I love to tell the story, 'Twill be my theme in glory,
To tell the old, old story. Of Jesus and His love.
2. I love to tell the story, more wonderful it seems / Than all the golden fancies of all our golden dreams; / I love to tell the story, it did so much for me, / And that is just the reason I tell it now to thee.
3. I love to tell the story, 'tis pleasant to repeat, / What seems each time I tell it more wonderfully sweet; / I love to tell the story, for some have never heard / The message of salvation from God's own holy Word.
4. I love to tell the story, for those who know it best / Seem hungering and thirsting to hear it like the rest; / And when in scenes of glory I sing the new, new song, / 'Twill be the old, old story that I have loved so long.